

③ 『覚悟』

ミチが句会に招かれ帰宅が夜になる時は、終わる頃を見計らって利之助は必ず迎えに行った。帰り道を寄り添って歩きながら、ミチはいつもその日詠んだ句をそらんじて聞かせた。利之助はミチの句を聞くのが楽しくて仕方ないらしく、顔を覗き込むようにして聞いては、いつもく感じ入った様子で同じ事を尋ねた。

「ミチはどうしてそんなに上手く句を詠めるのだ？」

そう聞かれるとミチは、ふふつと笑いながら

「思いついたことを十七音にしているだけのことです。貴方も始めてみてはどうですか？」と、いつもと同じ答えを返した。

すると利之助も決まって

「いやいや、わしの柄ではない」と同じ言葉を返し、ミチの句を胸の中で何度も反芻した。

その利之助がミチの気付かないところで俳句の練習をしていたのだ。

綴られた紙の束に利之助の句を見つけた瞬間から、俄かに沸き立った血の流れが、激流となつて体中を駆け巡る高揚に、ミチは暫く陶然と身体を預けていた。

夫の死後、自身の体に流れる血の温かみさえ忘れてしまったような毎日を送って来た。だが、俳諧に親しむことは、優

しかった利之助といつも一緒に居ることになる。

そう気付いたミチは、八年間の利之助との思い出を胸の奥底に仕舞い込むと、猛然と俳諧の勉強を始めた。

今までも誘われて句会には何度も加えてもらった。しかし、どれほど本気で俳諧に取り組んで来ただろうか。余技として楽しんで来たが、決して人生を左右するほど重いものではなかった。

だけど今は違う。俳諧を大切に思うことは、利之助を大切に思うことと同じことなのだ。そう思えた。

子供の頃から利発で物怖じしない性格は、物言いも率直で、時として父親を困惑させることもしばしばだった。

「この子が男の子であつたら」と何度由永を唸らせたことだろう。

とは言ってもそこは矢張り武士の家庭。両親の教えは厳しかった。

大人になるに従って周りに合わせることも、女らしく振る舞う術も、特に利之助の元に嫁いでは、夫に仕える喜びも味わって来た。

それを窮屈に感じたことは一度もなかった。だけど、利之助の綴りを目にしてからのミチは、少しばかり身に添わない着物を一気に脱ぎ捨てた感触を味わっていた。

夫の迎えを頼りにしていた句会の帰りの夜道も一向に苦にならなくなった。

白滝山にこだます風の唸りも、黒い木々のざわめきも、キツネが呼び交わす甲高い声も、おどろおどろしいフクローの夜鳴きも、少しもミチを驚かせはしなかった。

それらの総てが、今のミチには優しい歌声にも聞こえるのだった。

夫の三回忌を済ませたミチの心の中で、今までぼんやりとしていた或る思いが、明確な決意に形を変えつつあった。

俳諧を学べば学ぶほど、その先に次第に大きく見えて来るのは俳聖松尾芭蕉の姿だった。

芭蕉の心に同化したい。その思いは日を追って強くなって行った。

旅に出よう。

そう心を決めると行動は早かった。親類筋の若者を養子に迎え、その若者に嫁をとらせると、利之助との生業の総てを譲ってしまい、身体一つで長府の父母の元へ身を寄せた。

田も畑も家も何も要らない。これからは月華を住み家とし、旅に死ぬならそれもよし、ミチの心は早くもみちのくの空の下を駆けていた。

困惑したのは両親だった。旅に出ると云うミチの決意を聞きながら、母親のタカは、もう泣き出さんばかりの顔でミチを見ていた。

家督を養子に譲ってまで出るといふ女の一人旅など、タカにとっては天地が逆転するほどの大事件だった。

とても黙って許す事など出来るはずもない。ミチの手を握りしめながら、しかし、タカの言葉は声にならなかつた。

由永には判っていた。ミチの決心を覆すのは無理なことを。子供の頃から一旦決めた事はやり通すのがミチだった。決して意地っ張りというのではなかつたが、由永が一度教えた読み書きなど、繰り返し復習をしていたのだから、翌日由永と向き合った時には、完全に自分のものにしていった。

俳諧にしてもそうだった。武家の子女としてのたしなみくらの軽い気持ちで手ほどきをしたにも拘わらず、たちまち腕をあげて、気付けば老練の俳諧師達と同座するまでになっていたのだ。

由永は心を決めた。尼になることを条件にミチの申し出を承知するしかなかつた。

ミチはもとよりそれを望んでいた。仏門に入る事は、利之助の供養を積むことでもある。

浮き世の塵の総てを捨て去る覚悟は、夜ごと夜ごと、自分の心に繰り返し問いかけて固めた事だった。